

# INTERVIEW

元々 鳥羽市立神島診療所 所長  
奥野正孝先生



## へき地は医者ステキにする

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

### 人との関わりをする医者というジャンル

山田隆司(聞き手) 今日は「第17回へき地・地域医療学会」の招聘講演でお話しいただいた元々鳥羽市立神島診療所長の奥野正孝先生に、インタビューに登場していただきます。先生の講演を拝聴し、先生が長く地域医療に関わってきた歴史の中のご自身の医師としての感性のようなものを窺い知ることができました。今日のお話を振り返って、先生が何を伝えたかったのかを改めて伺いたいと思います。

奥野正孝 普通こういう講演では自分がこれまで何をやってきたかということをお話すると思うけれど、私はそれはやめようと考えました。自分がやってきたことで何が残っているのかというこ

とを話そうと思いました。それはやはり「人」のことなんですね。聴いていて気づいたかどうか分からないけれど、私は臨床のことは1つも話さなかった。全部人のことを話したのです。もちろん臨床の中でいろいろなことがあるのだけど、でも、振り返ってみると、看護師さんとか事務の人とか、普通の地域の人たちのことがものすごく心に残っている。だから、それは医療者としてではなかったような気がするんですよ。それは一体どういうことなのでしょうね？

山田 人とのつながりというか、関わりというか……。

奥野 それを、ただ、その人がどうだったと言うと

「ああ、そうですか」という、単なる人と人との話で「ふーん」となる。だけどどんな医者になっていくかという1つとして、「そういう関わり合いをする医者」というのが、ジャンルとしてあってもいいのではないかと考えています。外科であれ、内科であれ。そういうことを今日話したかったのだけど、50分の中で伝えきるのは難しかったですね。

**山田** 私には充分響いて思わず涙ぐんだくらいでしたが、今、先生がおっしゃった、1つのジャンルである地域で働く医者のコアな要素を、もう少し分かりやすく明確にしたいですよ。例えば「総合診療医」と言われている医者の定義も難しい。脳神経外科医とか、消化器内科医というのは分かりやすいけれど。

**奥野** 今まで医者というのは、縦で、外科だ、内科だと言っていて、総合というのはそれを集めたものみたいなイメージがあります。だけど、実はそうではない。「総合診療」という言葉が曖昧すぎて、中身の定義ができてないですよ。だってそう言っている人たちが、それぞれ思惑が違うでしょう？

**山田** 全然違う。同床異夢のような感じですね。でも一番核心に近い部分は、やはりへき地や離島

など患者さんに近いところで、長くその地域に溶け込んで医者をやったことで、非常に豊かに感じたこと。そして患者さんや地域の人たちもそれを喜んでくれたこと。重要なものはそういうところだと思う。それは全ての医者に必要なものだと私は思っていますが。

**奥野** そうそう、そうそう。

**山田** でも、私たちが学んできた大学教育の中では、そういう価値観が必ずしも整理されていなかったですよ。

**奥野** われわれは卒業してまず「プライマリ・ケア」を始めたじゃないですか。その時、開業医の先生たちが「自分たちのやっていることもちゃんとしたジャンルだよ」ということを言ってくれた。私はあの「プライマリ・ケア」が一番元にあるような気がしています。ただ、「プライマリ・ケア」という名前がいけない。これだけ年数が経っているのに一般の人はほとんど知りません。そういう意味で「総合診療」も、私は言葉が駄目だと思う。だって一般の人たちが医者にかかる時「私は総合診療に行きます」とは言いませんよ、絶対に。シンパシーがない。そもそもわれわれがよく分からないのだから、一般の人に分かるわけがない。

## 「言葉」が伝えるイメージ

**奥野** 一方で「へき地」という言葉は面白いと思う。「へき地」というと、大体の人が「こんなイメージのところ」というのがある。そうすると、そこでの医療というのは何となく分かる。だから

私はへき地という言葉は使った方がいい気がしています。

**山田** 私はやはりアメリカで言うFamily Physician, イギリスやオランダで言うGeneral Practitioner,